

序

筆者は内科開業医（自称プライマリ・ケア医）ですが、30年前からクリニックで医学生や研修医たちの見学／実習／研修を受け入れることを積極的に行ってきました。

彼らが来ている期間中には、外来診療の合間や昼食時、あるいは往診の車で会話中などにいろいろなことを**彼ら**に話してきましたが、その内容は必然的に、大学や研修病院での教育・研修課程で触れられないような話が多くなりました。

これから本書でお伝えすることには、医学知識や診察手技などの話がほとんどなく、私が希求するプライマリ・ケアに関することや、患者さんとのコミュニケーション、患者-医師関係、診療所医療の特性、などについてが多いのは、そのためです。

開業についてもよく話しました。

彼らやこの本を読んでくださっている**あなた**もいずれ少なからぬ比率で、医師人生の中盤～後半は開業することになるからです。その多くはセカンドチョイスとしての開業であったり、場合によっては「やむなく」、「燃え尽きかかって」の開業もあるでしょう。

そんな事情で開業された人でも最終的に「開業してよかった。けれど、『もっと早く開業していればよかった』と悔やむようになることもしばしば見聞きしてきました。

彼らや**あなた**が卒前・卒後研修で接する先輩医師・教官の多くは、各診療科の醍醐味について語ってこられたと思います。でも、開業について熱く語る人ほとんどいないと思います。

そこで、開業医である筆者が開業医について語ることは、大事な使命だと思って**彼ら**に話して来ました。

しかしながら、私自身の病気やコロナ禍のため、医学生や研修医の受け入れをほぼ中断していました。

受け入れ中断から10年以上経った今、かつて語ったこと+ α を書きしるし、まだ見ぬあなたに伝えておきたいと思うようになりました。これは医師になって「教わり、実践し、伝える」ことをしてきた筆者の性（さが）なのでしょう。

こんなのが一冊あってもいいだろうと思って作ったこの本が、何かのご縁で手にとって下さったあなたに何らかのインパクトを伝えることができれば幸いです。

2023年12月

内山富士雄